



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<https://www.kokubunken.or.jp>
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

米映画『オッペンハイマー』を見て

—原爆開発・投下をめぐって、現在を考へる—

松井哲也

昨年七月に全米で公開されたこの映画は、日本では未公開のままであった。それはこの映画が第二次世界大戦時に米国で原爆を開発した物語であったためだが、今年二月に米国アカデミー賞七部門を受賞し、それと期を合はせて三月に日本公開が始まった。この映画の主人公のオッペンハイマーは原爆開発プロジェクト「マンハッタン計画」の技術リーダーで、映画は彼が戦後レッドパージを受け、その後名譽が回復される過程が交錯して描かれるが、ここではまづ技術的に核分裂が発見されるまでを振り返っておきたい。

原子核と放射線の世界を開いたのは一八九五年のドイツのレントゲン博士によるX線の発見であった。当時五十歳の博士は、電子線の実験で覆ひの下の感光紙が何故か黒く感光してゐることに気づき、

目に見えない放射線の存在を発見する。それが今も医療に使用されてゐるX線であった。その発見を切掛けにキュリー夫人などの欧州のノーベル賞学者を産み出し、更に一九〇五年にアインシュタインが「エネルギーは質量と光速の二乗に比例する」といふ特殊相対性理論を発表した。そしてドイツの男性化学者のオットー・ハーンとオーストリアの女性物理学者のリーゼ・マイトナーによるチームが中性子を照射したウランの原子核がほぼ半分に分れる現象を発見して、その質量減少の際にアインシュタインの理論通りに大量のエネルギーが放出されることも見出した。それが核分裂の発見であつて、不幸にも第二次世界大戦の一年前の一九三八年のことだつた。この発見は世界中を駆け巡つたが、核分裂がナチスドイツの科学

力によつて軍事利用されることを恐れたアインシュタインらの科学者が米国政府に進言しマンハッタン計画がスタートした。この計画には、最終的に延べ六十万人、約二十億ドルの国家資金（現在の価値で約一・五兆円規模）を投入されたと言はれ、その技術開発のリーダーを務めたのが理論物理学者のオッペンハイマーだつた。一九四二年九月に始まつたこの計画は、わづか三年後の一九四五年七月に核実験の成功に至る。驚異的な開発スピードだつたが、その二ヶ月前にドイツは既に降伏してをり、製造された爆弾は翌八月に広島と長崎に投下されたのであつた。

映画では日本の被爆状況は示されないが、本稿では永井隆博士の報告書を紹介したい。博士は長崎医大の医師で、原爆で奥様を亡くされ、自らも被爆されお子様を残して亡くなられるが、その生涯は『長崎の鐘』といふ唄や映画で広く知られて慕はれた方である。博士は爆心地から七百米の診察室で被爆し重傷を負ふが、布を頭に巻くのみで救護に従事されたといふ。その救護活動の中で執筆されたのが『原子爆弾救護報告書』でその最後に次のやうに記された。「すべては終つた。祖国は敗れ

た。吾^{わが}大学は消滅し吾^{わが}教室は烏^う有^{ゆう}に帰した。余等亦^{また}夫^{きつづ}々^つ傷^{きず}き^つ倒^{たふ}れた。住むべき家は焼け、着る物も失はれ、家族は死傷した。今更何を云はんやである。唯願ふ処はかかる悲劇を再び人類が演じたくな^い。原子爆弾の原理を利用し、これを動力源として、文化に貢献出来る如く更に一層の研究を進めたい。転禍為福。世界の文明形態は原子エネルギーの利用により一変するにきまつてゐる。さうして新しい幸福な世界が作られるならば、多数犠牲者の霊も亦慰められるであらう。」

長崎医大で放射線医学を専攻した博士は世界の原子核物理の状況も把握されてゐた。第二次大戦後、世界は博士の言葉通りに核のある世界に「一変」した。そして世界唯一の被爆国であつた我が国は、現在では原子力発電の事故をも経験した。私は原子力発電の技術開発に四十年従事してきた者で、その事故は今も痛恨事であるが、永井博士の記された「転禍為福」が我が国の原子力利用において改めて成し遂げられていくことがやはり大事であると考へてゐる。今回この映画を見て思ひを新たにした。それを記させて頂いた。
(日立GEニュークリア・エナジー(株))